花が見たもの

近藤マッセ

ヴィヴィアンが水のやり方を忘れてしまった。水やりを忘れるのじゃなく、水やりの仕方方を忘れてしまったのだ。窓際のサボテンには一日三回、たっぷりびしょ濡れになるくらい水をかけるのに、せっかくつぼみがついたダリアには見向きもしないので、土は白く乾いている。先日花が咲いたアニスヒソップも、上からザバっと水をかけられてポキっと折れてしまった。

はじめのうちは仕方なしに新しい植物を買い足していたが、結局ヴィヴィアンが次々枯らしてしまううちに私もいよいよ苛立ってきて、いい加減にしろと声を上げることが増えた。当の本人は最初、私が怒っている理由もわからずに、困惑した顔で首を傾けるだけだったが、やがて怒鳴られ続けるうちに俯き加減になって、より一層老け込んだ風になった。定年前であと五年。これからやっと余生をゆっくり過ごそうと考えていたのに、と私の頭に不安がよぎった。

そんなある日の夕方、ヴィヴィアンが「あなた」と言ってきた。なんだ、と返すと妻は「美容院に行くお金がほしいの」と言うではないか。新聞から顔を上げると、あいつが夕食に出してきた質素な生ハムのサンドイッチと、ひたひたになった残り物のサラダが目に入って、私は急に意地悪な気分になった。

一日中家でダラダラしてまともな料理も作らないお前が、美容院に行きたいだなんて、良い身分だな。

妻は一瞬泣きそうな顔を見せ、すぐに「そうね、すみません」とうなだれた。他人の施しを待っているだけだなんて、まるで植物と一緒ではないか。

ヴィヴィアンは、昔はもっとはきはきと明るく、魅力だった。私たちはかつて同僚で、あいつは必要とあらば上司に反論することも厭わず、それでいて周りにも気が利いてチャーミングでもあった。それなのに結婚して家庭に入ってからというもの、あいつは次第に籠りがちになって、輝きが失われてしまったのだ。

そんな時、私の職場の近くに新しい花屋ができた。小さな入口からは、都会の小さなジャングルよろしく溢れんばかりの緑が見えた。私は自宅で枯れ続ける花をどうにかするため、金曜日の仕事の後、その花屋に寄った。

ひとたび入口をくぐると中は意外と広かった。熱帯雨林を思わせる湿り気に満ちた青い匂いが鼻を刺激した。見渡すと、上下左右、視界のあらゆる場所で、見たこともない珍しい植物が腕を伸ばし、花の可憐さを競っていた。

奥まで進んだところで私は、ひっそりと強い存在感を放つ、ある鉢植えに目を奪われた。「レゾレンタ」と札がついたその鉢からは、人の首ほどもあろうかという太さの茎が伸び、そこから腕のように生えた二本の枝の先端には艶のある丸い葉がついている。

美しいでしょう？　滅多に入ってこない珍しい品種なんです。

突然後ろから声が聞こえた。驚いて振り返ってみると、紺色のエプロンに眼鏡の男が立っていた。ベテランの風格と人懐っこさを兼ね備えたその男は、きっとここの店主だろうと私は値踏みした。

独特の魅力があるね。私が言うと、店主が続けた。

東アフリカの原産です。現地では、「解決の花」と呼ばれているとか。

解決の花？

この花にお願いすると、いろんな問題を解決してくれるんですって。だからこの植物を見つけたら、みんなこぞって供え物をしてお願いをするんですって。

私は店主の言うことの意味がわからなかった。植物が物事を解決させるなんて。どうやって、と私が問うと、そこまではわかりませんね、と店主は頭を掻きながら笑った。でもどんな無理難題でも不思議と解決するんです。

私は気さくな店主のペースに乗せられ、その勢いで、妻が水やりの方法を忘れてしまってね、と口を滑らせてしまった。こんなことを誰かに話すのは恥ずかしかったが、この店主は、妻のことを打ち明けるのにふさわしい人に思えた。

水やりの方法を？　ふと店員の表情から笑顔が消えた。一瞬、こんなことを話してしまったのは間違いだったのではという思いが頭をよぎった。

最近はよくあるんですよね、花を愛する方法を忘れてしまうってのが。店主は言うと、ですが、と鋭い目を私に向けた。忘れてしまったとなると、かなり進行しているようですね。

私は結局、この珍しいレゾレンタを買うことにした。

植物というのは意外と侮れないんです。支払いを済ませた花を紙に包みながら、店主が言った。置物のようにそこにあるだけに見えて、実は周りをじっと観察しているんですな。

そう言って店主は手の平で鉢植えをポンポンと軽く叩いた。意外とこいつに、奥様のことをどうにかしてくれとお願いすれば、意外と手伝ってくれるかもしれませんよ。紙袋を受け取って中を見下ろすと、新たな主人となった私を、袋の中からじっと見定めているかのように思えて、鼓動が速まった。

家に着いて紙袋からレゾレンタを出してみると、どうやら帰宅の途で茎に「X」字の傷をつけてしまったようだった。私は慌てたが、幸いにも大した問題ではなさそうだったので、私はこいつをそのまま寝室の窓際に置いた。新しい住処だ、と私は心の中で話しかけた。お前が本当に特別な能力を持っているなら、遠慮なく見せてみろ。

その夜の就寝前、寝る支度を終えて寝室に入ると、妻が話しかけてきた。

前にダメって言われた美容院なんだけど、どうしても行きたくて。やっぱりダメかしら？

一度ダメだって言ったんだから、と言いかけたが、まるで口が勝手に動いたように、思いがけずに「仕方ないな」という言葉が喉から出てきた。そんな自分に驚いてふと見ると、窓際で買ったばかりのレゾレンタがこちらを見ていた。

以来私は、自分でもわかるくらいに妻に甘くなった。前みたいに厳しいことが言いえなくなってしまったのだ。新しい服やアクセサリーが欲しいと言われれば、あまりみすぼらしい恰好をして、ご近所に変な噂を立てられても困る、などと自分から理由を作って金を妻に渡してしまう始末だった。

だが妻の顔には再び明かりが灯るようになった。さらに妻は水やりの仕方も思い出し、最近では、レゾレンタにも何事かをよく話しかけているようだった。レゾレンタは順調に大きくなり、枝の先の巨大な葉は、広げた手のように形を変えてきた。つられるように、周りの植物も新しい葉を次々と芽吹かせ、つるを伸ばし、色鮮やかな花を咲かせた。そんな妻と植物の変化を、私は驚きながらも嬉々として受け入れた。レゾレンタのおかげとも言うべきだろうか。

最近、調子が良さそうじゃないか。私は夕食を作る妻に言った。妻は集中しているのか、特に返事もせずに料理を続けていたが、整った身なりで美しい妻の姿を再び見るのは悪くなかった。

私は明日にでもまた例の花屋に行ってみようかと思った。妻が元に戻ったこと、それにレゾレンタも順調に育っていることをあの店主に報告してやろうと思ったのだ。さらに別の花を買っても良い。

不思議なことが起こったのは、そんなことを考えていた夜だった。私は冷たく濡れた何かに触れたような不快感で目を覚ました。私は最も恥ずかしい失敗をやらかしてしまったのではないかという不安に襲われ、シーツや衣服のあちこちを探ってみたが、やがて濡れているのが足元だけであることに気が付いた。漏らしたのではないことに安心しながらも、今度はこの水はどこから来たのか、という疑問に当たった。天井からの水漏れや、雨漏りなどを考えたけれど、特に変わったところはない。けれど、おい、といつも隣に寝ているはずの妻に声をかけようとして見ると、姿が見えない。上半身を起こして見回すと、寝間着姿の妻が例の植物の前に立って何かをブツブツと呟いている。

おい、ヴィヴァン。何をやっている？　私は半分眠ったまま声をかけたが、妻に私の声は届いていないようで、何の反応もない。

おい！　もう一度、より強い声を出した。妻ははっと我に返って驚いたようにこちらを見ると、あら、私は何をやっているのかしら、と言った。私は妻がまたおかしくなってきたのかと疑った。

次の朝私は、濡れてしまったベッドの代わりにソファで目を覚ました。妻は呑気に鼻歌を歌いながらコーヒーを淹れている。

洗面所で顔を洗ってふと鏡を見ると、自慢の黒髪に一本、白髪が見えた。引っ張ると、白髪はチクリという痛みと共に抜けた。ゴミ箱に捨てる直前、何の気なしに私は見たその髪の毛の異常さに、ハッと息を飲んだ。先端が細く何本にも枝分かれしており、髪の毛というよりもむしろ、植物の根のようだった。どういうことだろう。私は自分の髪の毛をつぶさに掻き分け、同じような白髪をもう一本見つけた。家にある植物の根が髪の毛に混ざってしまったのだろうか。

私は気にしないことにしたが、それからというもの妻が私の言葉に反応することが目に見えて少なくなった。そうしているうちに「根」は増え続け、気が付くと数日のうちに私の黒髪はあっという間に灰色になり、私の声が妻の耳に届くことはなくなった。代わりに妻は、あのレゾレンタと楽しそうに会話している。今日も疲れたでしょう、などと言いながら、まるで私と話す時のような口調で、あの植物に新鮮な水をやっている。

おかしなことは続いた。根のような白髪に続き、耳の中から小さな葉が生えてきたり、咳をすると花びらのようなものが、痰に混ざるようになってきたのだ。私の体に何かが起こっている。それは確かだったが、実際に何が起こっているのかはわからなかった。

私はあの花屋に向かった。奇妙なことが起こり始めたのは、あの忌々しい植物を買ってからなのだ。

「おい、どうなっているんだ？」

私は店に入るなり、呑気に花に水をやる店主に近寄った。

「おや、この前の旦那、問題は無事にご解決となりましたか？」

「とんでもない、解決どころかよけいおかしくなっているぞ」

「それは妙ですね……」と店主はしばし考えた後、もしかしたらと言った。

「花の方で実はすでに解決法を提示しているけれど、それは旦那の考えるような解決方ではないのかもしれません」

花屋は正しかった。妻が私に反応しなくなってから何日経っただろうかという頃、肌がまるで木の外皮のように茶色く固くなり、あちこちから葉っぱが芽吹くようになって、私はこの奇妙な現象の全体像が掴めてきた。私は植物に乗っ取られてしまったのだ。なぜかって？　わからない。けれど、そう確信した時にはもう手遅れで、私にできることといえは、次々出てくる芽をちぎり取るだけになったが、敗北までの時間は長くなかった。

ついにその日が来たことを悟ったのは、十月のある土曜の朝だった。目を覚ますと、体に根が張ってしまったかのように指一本動かすことができなくなっていた。かろうじて目だけは動かすことができて、濃い緑色の葉っぱで遮られた視界の先

に、私が寝ていたはずのベッドだけが見えた。そこに横たわる妻がやがて目を覚まし、ベッドから起き上がると、そこにもう一人、人影があった。不思議な光景だったが、それはどうみても私自身だった

すぐいそいつは偽物だと私は大きな声で妻に言おうとしたが、まるで太い丸太を喉に突っ込まれたように、声が出なかった。あの偽物は一体誰だ。そう思った瞬間、私は戦慄した。偽の私のうなじには、赤い「×」字の傷がある。

私は気が付いた。これはあの鉢植えからの景色ではないのかと。私は鉢植えの植物になってしまったのだ。私はなんとかそこから動こうとしたが、せいぜい二本の腕のような枝についた葉をハラハラと動かすのがいいところだった。

偽物の私は、妻の横で腕を天井に向かって投げ出すようにしてあくびをしながら、起きたばかりの妻の髪に手をやり、親密そうなキスをした。

朝ご飯の前に花にお水をあげちゃいますね。妻は、私の方を指さしながら言った。実は、私この植物にお願いしたんです。あなたがあまりに怖いから、どうにかしてくれって。でもそんな必要はなかったみたい。

妻はベッドから出て青いじょうろを手に取った。大量の水がバタバタと私の頭上に落ちてきた。私は思わず涙を流した。その涙は、露となって葉っぱを伝い落ちたが、妻はそれに気付く様子はなかった。私は人間の体を取り戻す方法を考え始めた。